

# 指導教員を選ぶための手引き

国際人間科学部グローバル文化学科

2021（令和3）年4月

## 目次

卒業までのスケジュール.....	1
履修体系の概念図.....	2
履修要件について.....	3
指導教員決定の手続きについて.....	6
プログラム変更について.....	7
指導教員変更について.....	7
交換留学中の「グローバル文化特別演習」の履修について.....	8
指導教員が長期不在の場合の「グローバル文化特別演習C・D」の履修について.....	8
「卒業研究」資格判定について.....	8
グローバル文化学科教員の紹介.....	9

## 卒業までのスケジュール

- 【1年次】 プログラム選択
- 【3年次】 指導教員決定
- 【4年次】 卒業研究届提出・卒業論文提出

卒業までの主なスケジュール表

1年次	2年次	3年次	4年次
<p>【4月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学</li> <li>・履修ガイダンス</li> </ul> <p>【7月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラム選択ガイダンス</li> </ul> <p>【10月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎演習」履修開始</li> </ul> <p>【1月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラム選択</li> </ul> <p>【2月】</p> <p>下旬</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラム決定・発表</li> </ul>	<p>【4月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・履修ガイダンス</li> </ul> <p>【10月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「発展演習」履修開始</li> </ul>	<p>【4月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指ガイダンス</li> </ul> <p>【6月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラム変更願(~6/30)</li> </ul> <p>【7月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教員希望調査 (7/26~30)</li> </ul> <p>【9月】</p> <p>中旬</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教員決定・発表</li> </ul> <p>「グローバル文化特別演習 AB」教務学生係で一括登録 (留学・休学者除く)</p> <p>【10月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「グローバル文化特別演習」履修開始</li> </ul> <p>【1月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教員変更願(~1/31)</li> </ul> <p>【3月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「卒業研究」履修資格判定</li> </ul> <p>中旬</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教員変更結果発表</li> </ul> <p>下旬</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「卒業研究」履修資格者発表：合格者のみ教務学生係で一括登録(休学者除く)</li> <li>・「グローバル文化特別演習 CD」教務学生係で一括登録(休学者除く)</li> </ul>	<p>【4月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「卒業研究」履修開始</li> <li>・卒業研究届提出(~5/20)</li> </ul> <p>【7月頃】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業論文中間発表会 (クラス単位)</li> </ul> <p>【9月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「卒業研究」履修資格判定 (該当者のみ)</li> </ul> <p>中旬</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業論文提出資格者発表</li> </ul> <p>【11月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業研究届提出 (該当者のみ)</li> </ul> <p>【1月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業論文提出(1/20ㄝ切)</li> </ul> <p>【1~2月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業論文口頭試問 (クラス単位)</li> </ul> <p>【3月】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業判定</li> </ul> <p>中旬</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業者発表</li> </ul> <p>・卒業</p>

# 履修体系の概念図

	1年次	2年次	3年次	4年次
全学共通授業科目	基礎教養・総合教養			
	外国語			
	情報			
	健康・スポーツ科学			
学部専門科目	学部共通基礎			
	学部共通発展			
	グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)科目			
学科専門科目	学科共通			
	学科コア			
	講義(学科展開)			
	グローバル〇〇基礎演習			
	グローバル〇〇発展演習			
	グローバル文化特別演習			
			卒業研究	

## 履修要件について

国際人間科学部グローバル文化学科を卒業するために必要な単位数は以下のとおりです。

グローバル文化学科履修要件（「国際人間科学部規則 別表第2 イ」に補足しています）

区分等		授業科目等	必要修得 単位数	超過分 算入先*		
全学共通授業科目	基礎教養科目	(指定された基礎教養科目)		6 ※3		
	総合教養科目			8 ※3		
	外国語科目	外国語第 I	English Communication A1	0.5	5 -	
			English Communication A2	0.5		
			English Communication B1	Advanced -		0.5
			English Communication B2	Advanced -		0.5
			English Literacy A1			0.5
			English Literacy A2			0.5
			English Literacy B1	Advanced -		0.5
			English Literacy B2	Advanced -		0.5
			Autonomous English 1			0.5
			Autonomous English 2			0.5
	外国語第 II (ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語のうち入学時に選択した言語)	○○語初級 A 1		0.5	4 -	
		○○語初級 A 2		0.5		
		○○語初級 B 1		0.5		
		○○語初級 B 2		0.5		
		○○語初級 A 3	○○語初級 S A 3	0.5		
○○語初級 A 4		○○語初級 S A 4	0.5			
○○語初級 B 3		○○語初級 S B 3	0.5			
○○語初級 B 4		○○語初級 S B 4	0.5			
健康・スポーツ科学	健康・スポーツ科学実習基礎 1		0.5	1 -		
	健康・スポーツ科学実習基礎 2		0.5			
情報科目	情報基礎		1	1 -		
その他必要と認める科目 (区分なし)	(上記以外の全学共通授業科目)		0	※3		
高度教養科目			0	※3		
資格免許のための科目			0	-		
他学部専門科目			0	※3		

\*超過分算入先：必要修得単位数より多く修得した単位の算入先を示しています。

区分等		授業科目等		必要修得 単位数	超過分 算入先*		
専門科目	学部専門科目	学部共通基礎科目	必修	初年次セミナー	1	6	-
				国際開発援助論 (JICA) 1	1		
				国際開発援助論 (JICA) 2	1		
				コミュニティ創成論	1		
				情報リテラシー演習 1	1		
				情報リテラシー演習 2	1		
		選択	(上記以外の学部共通基礎科目)		3	※3	
		学部共通発展科目	必修	グローバル共生社会論	1	3	-
				Academic Communication (英) A	1		
				Academic Communication (英) B	1		
			選択必修	Academic Writing (英) A	1	2	※1
				Academic Writing (英) B	1		
	TOEFL演習A			1			
	TOEFL演習B			1			
	TOEIC演習A			1			
	TOEIC演習B			1			
	English Presentation Skills A			1			
	English Presentation Skills B			1			
	English for Professional Purposes A			1			
	English for Professional Purposes B			1			
国際コミュニケーション演習A	1			1	※1		
国際コミュニケーション演習B	1						
Cultures and Societies in Japan A	1	1	※1				
Cultures and Societies in Japan B	1						
選択 ※1	(上記以外の学部共通発展科目/算入科目)		1	※3			
グローバル・スタディーズ・プログラム科目	必修	グローバルイシュー概論	1	4	-		
		グローバルイシュー演習	1				
		GSP演習 (オリエンテーション)	1				
		GSP演習 (リフレクション)	1				
	選択必修	留学型GSコース	3	3	-		
		実践型GSコース	3				
		研修型GSコース	3				
学科専門科目	学科共通科目	選択必修	情報科学概論A	1	4	※2	
			情報科学概論B	1			
			グローバル・ヒストリーA	1			
			グローバル・ヒストリーB	1			
			グローバル化と現代世界A	1			
			グローバル化と現代世界B	1			
	学科コア科目	選択	(任意の学科コア科目)		6	※2	
	学科展開科目	必修	グローバル文化特別演習A	1	14	-	
			グローバル文化特別演習B	1			
			グローバル文化特別演習C	1			
グローバル文化特別演習D			1				
卒業研究			10				
選択必修		(任意のグローバル○○基礎演習A～D)		4	※2		
	(任意のグローバル○○発展演習A～D)		4	※2			
(区分なし) ※2		(上記以外の自学科専門科目/算入科目)		28	※3		
自由選択科目 ※3		(算入科目)		16	-		

【要注意】「高度教養科目」について（2019年度便覧 158頁）

【グローバル文化学科】

授業科目の区分等			授業科目等	必要修得 単位数	備考
高度教養科目			国際人間科学部高度教養科目の取扱いについては別に定める。	4	グローバル・スタディーズ・プログラム(GSP)科目7単位を修得した学生は、高度教養科目の修得を要しない。 <b>ただし、高度教養科目として修得が必要な4単位分は、規則別表第1の口に定める学科専門科目から修得するものとする。</b>
専門科目	学部共通 基礎科目	必修	別表第1の口に掲げる授業科目のうちから別に定める授業科目	6	9
		選択		3	
	学部共通 発展科目	必修	別表第1の口に掲げる授業科目のうちから別に定める授業科目	3	7
		選択必修		3	
		選択		1	
	グローバル・スタ ディーズ・プログラ ム(GSP)科目	必修	別表第1の口に掲げる授業科目のうちから別に定める授業科目	4	7
		選択必修		3	
学科専門科目	学科共通 科目	選択必修	別表第1の口に掲げる授業科目のうちから別に定める授業科目	4	56
	学科コア科目	選択	別表第1の口に掲げる授業科目	6	
	学科展開科目	必修	別表第1の口に掲げる授業科目のうちから別に定める授業科目	14	
		選択必修		8	
自由選択科目			本学部専門科目、学科専門科目、他学部専門科目、全学共通授業科目(資格免許のための科目を除く。)、 <b>高度教養科目</b> から履修する。	16	
合計				124	

学科専門科目を+4単位  
修得する必要あり。

具体的には、学科共通科目、学  
科コア科目もしくは学科展開科目  
の選択科目から4単位を余分に  
修得すること。  
学科専門科目の必要単位数は、  
56単位+4=60単位となります。

【注意！】

「高度教養科目」の単位を修得した場合は、  
「自由選択科目」に参入されます。  
「高度教養科目」を4単位修得したとしても、  
「学科専門科目」の中に参入はされません！

## 指導教員決定の手続きについて

3年次第3クォーターから始まるグローバル特別演習及び4年次の卒業研究は、指導教員から指導を受けます。3年次7月に指導教員希望調査を実施し、9月に指導教員が決定します。(長期留学等で4年での卒業を希望しない場合にも、同様のスケジュールで指導教員を決定するので注意してください)

指導教員の決定後、グローバル文化特別演習及び卒業研究については、教務学生係が一括で履修登録を行います。諸事情により、標準配当年次にグローバル文化特別演習の履修を希望しない場合には、履修取消期間中に履修取消を行ってください。

### <指導教員希望調査>

#### 1. 調査方法

うりぼーネットのアンケート「グローバル文化学科指導教員希望調査」により実施

#### 2. 調査項目

- ・ 第1希望から第3希望までの指導教員  
(自分のプログラムの教員を選択すること)
- ・ 卒業研究のテーマ及び概要

#### 3. 調査期間

7月26日(月)～7月30日(金)

#### 4. 結果発表

9月中旬(予定)

#### 5. 注意事項

- ・ 必ずしも第1希望の教員に決まるとは限りません。必ず第3希望まで選んでください。また、指導教員は、第1希望から第3希望まですべて自分が選択したプログラムから選んでください。(各プログラムの教員については、「グローバル文化学科教員一覧」(pp. 29-30)を参照のこと。)
- ・ 「教員一覧」で、3年次第3・4クォーターに在外研究などで「不在」と記された教員も、指導教員に希望することができます。不在教員が指導教員に決まった場合、3年次第3・4クォーターの期間は、別の教員が指導教員(仮指導教員)となり、その教員の特別演習を履修することになります。その場合、3年次1月下旬に「指導教員変更願」を提出し、4年次以降の指導教員を変更してください。

## プログラム変更について

プログラム変更については、プログラム定員に空きがある場合は、グローバル文化学科会議の議を経て認められることがあります。選択したプログラムの変更を希望する場合は、以下のとおり申請の手続きを行ってください。

### 1. 申請方法

「プログラム変更願」を教務学生係に提出

(3年次6月初旬から鶴甲第一キャンパス事務課教務学生係で配付予定)

### 2. 申請期間

3年次6月中旬～6月末日

### 3. 結果通知

3年次7月中旬(予定)

### 4. 注意事項

申請は、変更希望先プログラムの演習を4単位以上履修していること(3年前期に履修中でも可)を条件とします。また、プログラム定員に空きがない場合は、変更が認められません。

## 指導教員変更について

指導教員変更については、グローバル文化学科会議の審議を経て認められることがあります。指導教員の変更を希望する場合は、以下のとおり申請の手続きを行ってください。

### 1. 申請方法

「指導教員変更願」を教務学生係に提出

(3年次1月初旬から鶴甲第一キャンパス事務課教務学生係で配布予定)

### 2. 申請期間

3年次1月中旬～1月末日

### 3. 結果通知

3年次3月中旬(予定)

### 4. 注意事項

教員一人当たりの指導学生数の関係等で、希望が認められない場合があります。

## 交換留学中の「グローバル文化特別演習」の履修について

3年次第3・4クォーターの「グローバル文化特別演習A・B」は、留学中には履修することができません。4年次第3・4クォーターに履修してください。

4年次第1・2クォーターの「グローバル文化特別演習C・D」については、4年で卒業を希望する場合は、留学中でも遠隔指導により履修することが可能です。遠隔指導を希望する場合には、事前に指導教員に連絡し具体的な履修方法などを確認してください。なお、留学中で遠隔指導を受けている場合でも、7月頃に各クラスで開催する卒業論文の中間発表会には、各種メディアを通して参加することが求められます。

「グローバル文化特別演習C・D」の遠隔指導を希望せず、翌年の第1・2クォーターに履修する場合は、自分で履修取消を行ってください。

## 指導教員が長期不在の場合の「グローバル文化特別演習C・D」の

### 履修について

指導教員が長期出張等で不在になる場合でも、4年次第1・2クォーターの「グローバル文化特別演習C・D」を遠隔指導で開講する場合があります。その場合は、当該指導教員の特別演習を履修します。

指導教員が長期不在により「グローバル文化特別演習C・D」を開講しない場合には、「グローバル文化特別演習C・D」を履修するために、指導教員を変更する必要があります。その場合は、教員間で調整の上変更手続きを行いますので、「指導教員変更願」を提出する必要はありません。

## 「卒業研究」資格判定について

卒業研究（必修10単位、4年次配当）を開始するためには、3年次終了時点（在学期間3年以上）において、以下の単位を修得する必要があります。「卒業研究」資格判定の合格者については、教務学生係で卒業研究の履修登録を行います。不合格では、4年前期から「卒業研究」を履修を開始できず卒業が遅れ、4年での卒業は不可となります。注意してください。

「卒業研究」資格判定基準（グローバル文化学科）

全学共通授業科目	23 単位	専門科目	40 単位
・外国語科目	9 単位	・初年次セミナー	1 単位
・情報科目	1 単位	・グローバルイシュー概論	1 単位
・健康・スポーツ科学	1 単位	・グローバルイシュー演習	1 単位
・基礎教養科目、総合教養科目	12 単位	・国際開発援助論（JICA）1及び2	2 単位
※基礎教養科目は6単位、総合教養科目は8単位を上限とします。		・グローバル共生社会論	1 単位
(例)基礎教養 7 単位、総合教養 5 単位・・・判定は不合格		・Academic Communication（英）A及びB	2 単位
基礎教養 7 単位、総合教養 6 単位・・・判定は合格		・情報リテラシー演習1及び2	2 単位
		・上記以外の学部専門科目、学科専門科目	30 単位

## グローバル文化学科教員の紹介

※4月1日時点で着任が決まっていない新任教員の紹介は別途お知らせします。

### 1. グローバル文化形成プログラム

今日の世界に存在する多様な文化と価値観が、どのような過程を経て形成され、また相互の交流・摩擦・征服等を通じていかに変容してきたのかを正確に把握し、我が国との相互比較的な視点も交えた文化的理解ができる力を身に付けます。

### 日本学クラスタ

自分の文化に対する理解が不十分で、自分の文化を発信できないようでは、異文化理解や国際理解はありえません。国と国、民族と民族の間の、差異を認めつつ強調するためにも、他者理解とともに自らが属する日本および日本文化への理解は必須です。日本学クラスタでは、新しい方法論を模索しつつ、日本文化の社会、歴史の特質について多角的に研究します。

### アジア・太平洋文化論クラスタ

中国、モンゴルなどの東アジアとインドネシア、タイなどの東南アジア、オーストラリア等のオセアニアをカバーします。歴史と社会、民族と文化、宗教と価値観、国家と越境する人々など、地球の面積と人口で5割を占める広大な地域に生きる人々のダイナミックな営みを、文字資料だけでなくフィールドワークにもとづいて考えます。

### ヨーロッパ・アメリカ文化論クラスタ

ヨーロッパおよびアメリカの歴史、文化、思想、芸術を地域・領域横断的に研究します。今日のグローバル化した社会の基盤となり、非「西洋」世界にも根づかせた欧米的な価値観や社会制度を再検討することで、現代社会が抱える課題の解決に取り組みます。

### 越境文化論クラスタ

今、世界ではさまざまな文化が国境や地域を越えて広がっています。こうした越境する文化を現代と歴史的な視点から考察します。特に科学技術や言語・文化などを考察の対象にしながら、文化越境のもたらすダイナミズムを探ります。

### 芸術文化論クラスタ

文字言語、視覚イメージなどさまざまなメディアを通じて営まれる音楽や演劇などの芸術文化は、社会批判も含めた多様な社会的機能をもっています。現代社会のなかでアートがどのような役割を果たし

ており、また果たしうるのかを過去から現在にいたるさまざまな具体例にそくして掘り下げます。

## <教員紹介>

### 日本学クラス

辛島 理人（からしま まさと） 担当科目：日本社会文化論A・Bほか

専門分野：国際関係、文化交流、現代日本

【2021年度は講義・演習を担当しない】論文指導（特別演習・卒業研究）は、私の「基礎演習」か「発展演習」に参加していることが条件です（そうでない場合は事前に連絡すること）。経済と文化が交差する領域（例：民間外交、開発援助、地域振興）に注目しながら、東南アジア、オセアニア、中東欧といった世界と日本の関係を研究しています。ゼミでは、これまで運動部・文化部員、交換留学経験・志望者をはじめとする学生が、観光、現代化、国際交流、多文化共生、広報文化外交、スポーツ振興策などを勉強してきました。3年次下半期では、**globalization**、**public diplomacy**、**tourism**などを主題とした英語文献を輪読します。

主な著書：『帝国日本のアジア研究』（明石書店、2015年）、「3つの万博をめぐる100年史」（『建築雑誌』2019年）、**Engineering Asia**（共著、Bloomsbury、2018年）など

昆野 伸幸（このの のぶゆき） 担当科目：日本思想文化論A・Bほか

専門分野：日本思想史

私は、近代におけるナショナリズムの諸相について、歴史思想や宗教との関わりから研究しています。比較的新しい時代に関心をもつ学生が多いですが、現代という時代は、良くも悪くも、それ以前からの積み重なりから成り立っています。その時代のことを調べていても、その歴史的な意味は分かりません。その時代においては当たり前と思われていたことが、歴史的にみればとても新しいことだったり、その逆に、新しいと思われていることが実はとても伝統的なものだったりします。現在の価値観を前提にして物事を考えるのではなく、歴史的に考える力を身につけていきましょう。

主な著書：『近代日本の国体論——〈皇国史観〉再考』（単著、ペリかん社、2008年）、『戦後史のなかの「国家神道」』（共著、山川出版社、2018年）など

寺内 直子（てらうち なおこ） 担当科目：日本文化交流論A・Bほか

専門分野：民族音楽学、日本音楽史

音楽・芸能を通して文化の形成や変化を研究しています。専門は日本の雅楽の歴史的、社会的研究ですが、時代の新旧、地域を問わず、音楽・芸能に興味のある学生さんを歓迎します。音楽・芸能の様式や伝承システム、その成立、変容、交流の歴史や背景、音楽家・芸能者の社会的身分や役割など、音楽・芸能の研究にはさまざまな観点があります。それらの分析視点を身につけることは、現代の文化政策や現代社会における文化の存続と発展を考える上でおおいに役立ちます。

授業では、「日本文化交流論」で「芸能の（と）ポリティックス」を論じています。また、演習では「世阿弥の芸術論」「音楽と参与」「音楽の記述と分析」「伝統芸能の保存と振興」など、毎年様々なテーマを取り上げています。主な著書に『雅楽を聴く』（2011）、『伶倫楽遊—芝祐靖と雅楽の現代』（2017）、*Presence Through Sounds: Music and Place in East Asia*（共著、2020）などがあります。

板倉 史明（いたくら ふみあき） 担当科目：日本メディア文化論A・Bほか

専門分野：映画学

映画、テレビ番組、インターネット動画など、私たちの生活のなかで日々接している映像の意味や役割を考察するのが映画学の魅力のひとつです。映画学の用語を活用して映像を読み解くことによって、その映像が生み出された国や文化の特徴を理解することができます。映画学を学ぶことで、留学や海外研修時に触れる映像文化を分析的に考察することが可能となります。

主な著書：『映画と移民』（新曜社、2016年）など

長 志珠絵（おさ しずえ） 担当科目：日本歴史文化論A・Bほか

専門分野：日本近現代社会史文化史、ジェンダー史、地域文化史

歴史の研究者で19-20世紀を対象にしています。「自国の昔」は実は「他者」であることを前提に、想定されている「生きていく場」の国境線の違いや、制度が作る区分等々のしくみをふまえ、人がどう生きるか、生きられるか—を考えます。50年前程度でも社会の常識は現代の感覚とは相当に違う—ことからどのような問いが生まれるのか？ かつ、歴史学はエビデンスの学問。調べる、読む—スキルを踏まえて立論する—によって、自分のいま・ここ—を相対化する知的営み、「他者」理解をめざす領域と考えてください。まずは手始めに、大学の空間を「歴史」しましょう。

主な著書：『ジェンダーから見た日本史』（共編著、大月書店、2014）、『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争』（共著、岩波書店、2015）、『占領期・占領空間と戦争の記憶』（単著、有志舎、2013）など

## アジア・太平洋文化論クラスタ

萩原 守（はぎはら まもる） 担当科目：北アジア歴史社会論A・Bほか

専門分野：東洋史、清代モンゴル史、モンゴル法制史

私の研究テーマは、16世紀末～20世紀初（すなわち清朝時代）における、モンゴルと中国の法制史です。具体的に言うと、モンゴル遊牧民の犯した刑事犯罪に関する裁判の実態を、モンゴル文・満洲文で書かれた当時の判決文や供述書から詳細に解明していくという研究です。ちょうど、昔のテレビ時代劇に出てくる捕物帖や犯科帳のような世界です。特に犯罪者の残した供述書は、まるでタイムマシンに乗って行って自分が彼らにインタビューしているかのような錯覚すら抱きそうな生々しさです。

ただし、授業ではモンゴル・中国・シベリア・日本等の近世・近代史を中心に、幅広い分野の歴史を教えていますし、ゼミ生たちの専門分野は多岐にわたっています。現地にもほぼ毎年通っています。

主な著書：『清代モンゴルの裁判と裁判文書』（創文社、2006年）、『体感するモンゴル現代史』（南船北馬舎、2009年）

伊藤 友美（いとう ともみ） 担当科目：東南アジア社会文化論A・Bほか

専門分野：東南アジア研究、タイ研究、仏教と女性、社会史

タイをはじめとする東南アジア上座仏教圏で、仏教等の宗教を生きる人々が作り出す近現代社会史を中心に研究しています。フィールド調査、インタビュー調査、ライフヒストリーの聞き取り調査を中心とした調査を行い、それらを話し手が生きた時代や社会の中で考察するという手法で、タイにおける仏教僧・社会運動家・学生運動のリーダー・女性修行者・タイ華人宗教者などに関する研究を行ってきま

した。同様の手法を用いて、仏教と女性という接点から、スリランカや東アジア諸国についての考察も行っています。学生の皆さんがそれぞれのテーマについて、魅力ある人生を送っている個人の人間らしい歩みや思想を通じて、知られざる世界の社会・文化・歴史を解き明かす面白さを共にしたいです。

主な著書：*Modern Thai Buddhism and Buddhadasa Bhikkhu: A Social History* (Singapore : National University of Singapore Press、2012)など

貞好 康志 (さだよし やすし) 担当科目：東南アジア政治文化論A・Bほか

専門分野：東南アジア研究、人間・環境学、イスラーム

インドネシア近現代史、とりわけナショナリズムの諸問題を主に「周辺者」としての華人(中国系住民)の視点から研究してきました。21世紀は、華人に典型的だった国民国家との折り合いづけや文化のせめぎあいの問題が決して他人事でなく、「自分とは何者か、どこでどう生きてゆくのか」という、誰にとっても切実な問いの一環として、ますます重要性をもつ時代になると考えています。卒論指導は、東南アジアに限らず、日本を含むアジア地域の歴史や文化、経済開発、環境、移民問題などに関心をもつ人を広く受け入れます。私自身がムスリムなので、イスラームについて学びたい人も歓迎します。

主な著書：『華人のインドネシア現代史』(木犀社、単著)、『変容する東南アジア社会』(めこん、共著)、『もっと知ろう！私たちの隣人—ニューカマー外国人と日本社会』(世界思想社、共著)

谷川 真一 (たにがわ しんいち) 担当科目：東アジア政治社会論A・Bほか

専門分野：現代中国の政治と社会、国際関係

中国を社会学、政治学、国際関係論といった社会科学の視点から研究しています。中国の文化大革命(1966~76)とは何であったのか？ 中国共産党の一元支配体制は今後どうなるのか(中国は民主化するのか)？ 中国の台頭はアメリカ主導の国際秩序にどのような影響をもたらすのか？ といったテーマに関心をもっています。

また中国以外のことにも、政治・社会運動、格差・階層、エリート、政治秩序、暴力など社会学者として幅広く関心をもっています。

主な著書：『中国文化大革命のダイナミクス』(単著、御茶の水書房、2011年)など

## ヨーロッパ・アメリカ文化論クラスト

小澤 卓也 (おざわ たくや) 担当科目：環大西洋文化論A・Bほか

専門分野：ラテンアメリカ近現代史、食のグローバル・ヒストリーズ

専門はラテンアメリカ近現代史です。特に中央アメリカ諸国を中心に、国民国家と少数民族の緊張関係や、コーヒーやバナナなどの輸出農作物をめぐる社会文化史的問題について、グローバルな視点から研究しています。演習の授業においては、ラテンアメリカに関心をもつ学生はもちろんのこと、世界の様々な食文化や「食のグローバル化」に関心をもつ学生も歓迎し、一緒に新たな知的発見を重ねていきたいと思っています。

主な著書：『バナナのグローバル・ヒストリー』(共訳・解説論文著、ミネルヴァ書房、2018年)、『教養のための現代史入門』(共編著、ミネルヴァ書房、2015年)、『コーヒーのグローバル・ヒストリー』(単著、ミネルヴァ書房、2010年)、『先住民と国民国家』(単著、有志舎、2007年)など

井上 弘貴 (いのうえ ひろたか) 担当科目：アメリカ社会論A・Bほか

専門分野：政治理論、公共政策論、アメリカ政治思想史

研究者として専門にしているのは政治学、とくにアメリカの政治です。安岡先生が計量分析の手法を駆使してアメリカ政治を研究されているのにたいして、わたしのほうは歴史や思想といった観点から、アメリカ政治にアプローチしています。また、アメリカのことにくわえて、演習科目ではこれまで、まちづくりや地域再生といったテーマで履修してくれたみなさんと勉強してきました。その延長線上で、ここ数年は観光、とくにインバウンド観光を各種の演習を担当した際のテーマにしています。日本でのインバウンド観光は、一時的な盛り上がりすぎない側面があるものの、さまざまな 이슈 を考える際の手がかりになることも確かです。関心があるみなさんとぜひ一緒に考えてみたいと思います。

主な著書：『熟議民主主義ハンドブック』（監訳、現代人文社、2013年）。最近の論文として「リベラリズムに背いて——ネオコン第一世代による保守主義の模索」『政治思想研究』第18号所収。

西谷 拓哉 (にしに たくや) 担当科目：アメリカ文化論A・Bほか

専門分野：アメリカ文学、映画論

文学と映画を中心として、アメリカ合衆国の多角的な文化状況や表現の独自性などについて研究しています。専門は19世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期の文学ですが、小説の映画化という観点から両者のナラティブとしての特徴を比較することにも関心を持っています。

アメリカ合衆国は政治、経済だけでなく芸術においても絶えず新しいものを追究する巨大な実験場と言っていいでしょう。文学や映画の分野でも文化の多様性を背景として独自の表現が次々に生まれています。そして、その一つ一つの表現にはアメリカの過去、現在、未来が隠されているのです。文学や芸術からアメリカを読み解いていくおもしろさを皆さんと一緒に体験したいと思っています。

主な著書：『環大西洋の想像力』（共著、彩流社、2013年）、『アメリカン・ルネサンス——批評の新生』（共編著、開文社、2013年）、『ホーソーンの文学的遺産』（共編著、開文社、2016年）など

松家 理恵 (まつや りえ) 担当科目：近現代表象文化論A・Bほか

専門分野：イギリス文学、近代イギリス文化、風景論

「近代化」ということを、自然に対する感受性の変化をとおして考察しています。手がかりとして、文学、思想、芸術（風景画と庭園）といった領域を扱っています。特に研究しているのは、その先駆けとなった18世紀から19世紀初めのイギリスですが、現代の日本における自然や土地との精神的関係性の変化にも注目しています。授業では、自然の表象のさまざまな具体例を取り上げて西欧近代の自然観の変化を歴史的に辿ることと併せて、みなさんが自分で見つけた風景を題材として、現代社会と自然の関係、都市の景観、個人の存在のアイデンティティと土地（場所）との関係などについて、その特質や問題点を一緒に議論したいと思います。

主な著書：『キーツとアポローン—ジョン・キーツの詩とギリシア・ローマ神話』（英宝社2000年）など

野谷 啓二 (のたに けいじ) 担当科目：宗教文化論1・2ほか

専門分野：英米文学、キリスト教文化

イギリス、アイルランド、アメリカ合衆国の文学・文化をキリスト教の観点から研究しています。宗教が文化形成にどのように関わっているか、個人と文化のアイデンティティ構成要素としての宗教に関心があります。イギリスはナショナリズムと絡む宗教改革を経験し、近代の政治経済文化の担い手とな

るピューリタニズムを生み、さらに帝国主義のもとでキリスト教ミッションを世界に派遣しました。キリスト教を考えることは必然的に近・現代の諸問題を考えることとなります。宗教を切り口にどのような問題を取り出せるか、知的にチャレンジしてみましょう。

主な著書：『オックスフォード運動と英文学』（開文社、2018年）、『キャッツ東京公演プログラム』（共著、劇団四季、2018年）、『モダンにしてアンチモダン——T.S.エリオットの肖像』（共編、研究社、2010年）、『21世紀イギリス文化を知る事典』（共著、東京書籍、2009年）など

## 越境文化論 クラスタ

田中 祐理子（たなか ゆりこ） 担当科目：越境文化形成論(2021年から開講予定、2020年以前生は履修不可)ほか

専門分野：現代哲学、科学史

私は「人間の認識ってなんだろう？」という哲学的な関心から、医学・生命科学を中心に科学の歴史を研究しています。「現実」の意味や「真理」の基盤は、歴史を通じて絶えず問い直され、ときに転換してきました。特に19世紀初頭以来、知識の形式は重要な変容を経験しています。この変容は、私たちの現代的な生活、あるいは「グローバル」な生活のありようを決定づける基盤となって、今日に続いています。人間の認識に関する問いが西洋哲学の領域で大きく発展したとき、同時にそこでは政治的・経済産業的な変革の総体が、人々の暮らしの形と基本条件とを変えていました。この変化はやがて国境を超えて拡大し、日本に住む私たちにとっても、それは「私たちの歴史」と呼ぶべきものとなったのです。この歴史を、哲学的な文献、歴史的な資料、そして現在起こっている様々な出来事・事象を丁寧に読み解きながら、探っていきたいと思っています。

塚原 東吾（つかはら とうご） 担当科目：科学技術文明論1・2ほか

専門分野：科学史・科学哲学、環境人文学

基本的には、テクノサイエンスと社会の関係をやっているのだけど、テクノとかいうと、文化系だと、引かれるかな？でも、これはキミたちが思っているよりも身近です。まあ、それについては、河合塾のサイトに書いておきました。<https://miraibook.jp/researcher/359>

ツカハラは、蘭学や日本帝国主義の技術、AI、人体・生命論・コロナに核や気象・軍事、それに環境問題、地球温暖化から、アラン・ウォーカーとかグレタ・トゥーンベリ、斎藤幸平や手塚治虫から藤井風、淡水魚や水棲昆虫とかまで、まあそこそこに守備範囲です。ググってください。というわけで、ツカハラは、「引き出しがやたらと多い」ということで、けっこう、いろいろできます。それと人脈の広さは、自分でも、ちょっとヤバイと思っています。だから大変だけど、まあ、勉強の楽しさとかは、教えてあげられると思うので、顔だしてみてください。へへへ。

北村 結花（きたむら ゆいか） 担当科目：文化翻訳論1・2ほか

専門分野：比較文学・比較文化

越境文化というと、たとえば日本とアメリカのような空間的な文化の越境を考えがちですが、過去と現代など時間的な文化の越境もあります。（もっとも境界や越境という言葉には<いかがわしさ>が付き纏っていることは常に留意しておくべきです。越境するその境界は確固として自明なものなのでしょうか？）私の演習では日本古典文学——特に平安時代から中世の作品——を取り上げ、それらが作られた

時代から現代に至るまでどのように受容されてきたのかを手掛かりに、時間や空間を越えて受容される文化の諸相を考えます。基本は作品を原文（古文）で丁寧に読むことです。さらに、英文で書かれた論文など海外における研究を含め、先行研究に目配りした上で、自らの研究テーマを決めることになるでしょう。日本で生まれ育った人にとっても、様々な意味で馴染みの薄い（とっつきの悪い）古文は異文化といってもいいかもしれません。まずは異文化としての古文に謙虚に向き合うことから始めたいと思います。

近藤 祉秋（こんどう しあき） 担当科目：越境社会学A・Bほか

専門分野：文化人類学、アラスカ先住民研究

私の研究関心は、(1) 人と動物の関係、(2) キリスト教化と現代の「スピリチュアリティ」、(3) 情報化社会・デジタル技術と先住民の関わりです。おもな調査地は内陸アラスカの 80 人程が住む小さな村ですが、最近では宮崎県の山村にも通って、猟師さんが獲ったシカ肉・イノシシ肉を販売する「ジビエ」事業の調査も始めています。

私は子どもの頃バードウォッチングが趣味だったのですが、それが高じて人と動物の関係に関心を持つようになりました。みなさんにとっても、気がつけば夢中になっていること、ついつい気になってしまうことはありませんか？ 自分にとって身近な問いに真摯に向き合いながら、「何でも見てやろう」（小田実）精神で新しい世界に飛び込んでいくのが人類学の醍醐味です。その醍醐味をぜひ一緒に味わいましょう！北方研究を志す若者、募集中！（北方以外の地域でもOKです）

## 芸術文化論 クラスタ

池上 裕子（いけがみ ひろこ） 担当科目：近現代アート論A・Bほか

専門分野：現代アート、グローバル・モダニズム、戦後アメリカ美術、近現代の日本美術

グローバル化が進む今日、現代アートは私たちが生きる社会でどのような意味を持つのでしょうか。私は近現代の美術や文化について、国際的・比較文化的な視点から考察しています。具体的には第二次世界大戦後のアメリカ美術や日本美術、ポップ・アートのグローバルな展開などがトピックです。講義では近現代美術の歴史を概観しながら現代アートと社会との関わりについて皆さん自身に考えてもらいます。演習では、文献講読・発表や展覧会の見学演習などを通して、「自分の眼で見て、自分の頭で考える力」を養いたいと思っています。

主な著書：『The Great Migrator : Robert Rauschenberg and the Global Rise of American Art』（MIT Press、2010）、『International Pop』（共著、Walker Art Center、2015）、『越境と覇権—ロバート・ラウシェンバーグと戦後アメリカ美術の国際的台頭』（三元社、2015年）など

石田 圭子（いしだ けいこ） 担当科目：近現代文化言説論A・Bほか

専門分野：美学、芸術論、表象文化論

私のテーマは近代以降の芸術と社会とのかかわり、とりわけ芸術と政治の関係や、他者とのコミュニケーションをめぐる芸術のあり方について考えることです。近代以降、芸術は社会から自律して独立した美の領域を築いたといわれています。しかしあらためて考えてみると、近代芸術が開花した時期は19～20世紀の政治の動乱期と重なりあっています。政治的イデオロギー間の激しい闘争や世界大戦といった社会状況のもと、芸術はしばしば政治と接触し、ときにはファシズムや共産主義と関係を結びまし

た。そうした芸術と政治をめぐる様々な局面を取り上げることを通して、近現代という時代を照らし出したいと考えています。授業では文学・美術・映画といった幅広い芸術ジャンルの作品を具体的に取り上げながら、芸術や文化一般について論じたテキストを分析します。

主な著書：『美学から政治へ—モダニズムの詩人とファシズム』（慶応義塾大学出版会、2013年）など

岡本 佳子（おかもと よしこ） 担当科目：近現代モード論A・Bほか

専門分野：舞台芸術論、西洋音楽史、中・東欧文化研究

音楽や演劇が持つ力は何だろうか？という問いを出発点に研究をしています。音楽劇や演劇は古くから情報伝達の媒体として観客へメッセージを発し、さらには社会へと伝播させる機能を有してきました。私はとくに中・東欧の近代舞台芸術作品（オペラや演劇等）を対象として、当時の創作者たちの表現に対する考え方や、観客が作品を前にした反応や驚き、そしてそれらの現代との違いについて調査、考察しています。

授業では学術的な思考を進めていく土台として「信頼できる情報にたどり着く」、「資料を正確に読みとる」、「相手に伝わる言葉で書く」ことを重視します。具体的には広く近現代の音楽や演劇に関する文献を講読したり、作品の解説文や公演の批評を書いたりして定期的に成果物を仕上げながら、各々の課題に沿った卒業論文の執筆につなげます。

主な著書：『神秘劇をオペラ座へ：バルトークとバラージュの共同作品としての《青ひげ公の城》』（松籟社、2019年）

松井 裕美（まつい ひろみ） 担当科目：視覚文化論A・Bほか

専門分野：近現代美術史・フランス美術史

美術史研究においては、まず作品を丁寧に観察し、分析した結果を正確に記述ことが重要ですが、芸術作品をより深く理解するためには、その作品がつけられた文化的・歴史的な背景を知る必要があります。ミクロな視点とマクロな視点の双方を行き来しながら、厳密な資料調査とその分析にもとづき造形作品やそれに関わる言説を考察するには、それなりの訓練や外国語文献を読んだり作品と向き合ったりする根気が必要となりますが、そのことによって新たな世界の見方を知る喜びもまた大きいものです。ひとつひとつの作品について考え、そこから見える世界についての理解を深める経験を、授業や演習を通して皆さんと共有していきたいと思います。とりわけ授業では、19世紀から20世紀までの西洋美術を中心に扱うことをとおして、作品の理解に必要な基礎知識や方法論を学ぶことを目標とします。

主な著書：『キュビズム美術史』（単著、名古屋大学出版会、2019年）など

岩本 和子（いわもと かずこ） 担当科目：表象文化形成論A・Bほか

専門分野：フランス語圏文学、芸術文化論

芸術文化は、民族・言語・地域ごとの独自性とともにより異文化接触による活性化、また公的制度による保護と同時に規範からの逸脱をも糧とするものです。私の研究対象はフランス語圏文化、特にフランスや隣の多言語国家ベルギーの言語芸術と文化的アイデンティティの問題や文化政策ですが、授業では世界のフランス語圏の芸術活動とそれを支える制度の形成過程や影響関係の諸現象について、言語テキストを中心に舞台芸術作品、美術作品なども紹介・分析しつつ講義します。英語圏文化中心のグローバリゼーションに対抗する形で「文化的多様性」を標榜するフランス語圏にも、絶対的中心パリがあります。パリとフランスの諸地域、ベルギー、スイス、ケベック、北アフリカ、カリブなどに目を向けてナショ

ナリズムと国際性、中心と周縁、移民、植民地、マイノリティ問題などに迫ります。

著書：『周縁の文学—ベルギーのフランス語文学にみるナショナリズムの変遷』（松籟社、2007年）など

高田 映介（たかだ えいすけ） 担当科目：芸術文化環境論(2022年から開講予定、2020年以前生は履修不可)ほか

専門分野：ロシア文学、ロシア文化・演劇

専門はロシア文学で、主にチェーホフという作家を研究しています。これまでは散文作品を主に扱ってきましたが、今後は芸術に限定的イメージを与えうる文化政策の影響、ときに国の別を越えて残存定着していくその過程と作品の関わりを明らかにすることによって、チェーホフの戯曲の現代的意義を追求することを目標としています。

授業の場では自身のテーマにこだわらず、各国の美術・音楽・演劇など素材として広く取り上げていく予定です。経済第一の新自由主義が限界を迎えつつある今こそ、芸術の力が頼まれています。しかし、文化や芸術は孤立して存在できるわけではなく、金銭的な援助や具体的な政策の策定を不可欠にしています。われわれが人間性を高め、「共創」「共生」を可能にするこれからの社会・芸術文化環境を形成するためにどのような行動を取ることができるのか、授業を通じて皆さんと考えていきたいと思えます。主な著書：『世界の瞬間——チェーホフの詩学と進化論』（水声社、2020年）、『ロシアの物語空間』（共著、水声社、2017年）など。

## 2. グローバル社会動態プログラム

グローバルな課題を解決し、グローバル共生社会を実現するために、情報・資本・人・モノの移動に伴って、世界と諸社会が相互に連動しながらダイナミックに変容する様態（グローバル社会動態）に注目し、グローバル社会が直面する重要な諸課題を解決するために何が求められているのかを分析し、発信する能力を身に付けます。

### 異文化関係論クラスタ

文化人類学の異文化（他者）理解とフィールドワークのアプローチによって、アジア、アフリカ、オセアニア、中南米などの諸社会の現代的状況を現場の社会的・文化的文脈で理解し、グローバル化によって起きつつある課題に具体的に取り組む手法を学びます。

### 多文化共生論クラスタ

民族、宗教や政治制度など、さまざまな領域における多文化共生の課題について、理念とともに現実を的確に把握しながら、時代と空間を縦断、横断しながら広く深く学びます。国際社会や地域社会の現場に接し、実践感覚を重視するこのクラスタでは、現状追認ではない積極的な問題解決の要請にこたえる能力をはぐくみます。

### モダニティ論クラスタ

近現代の社会思想・社会理論について学びます。グローバル化が進展する現在、主体、自由、民主主義、主権国家、市場など、近代の基本概念が大きく揺らいでいます。こうしたモダニティの原理を根底から問い直すことが、本クラスターの課題となります。

## 先端社会論クラスター

ジェンダー、グローバルな正義、メディア文化、現代社会、越境。これらをキーワードに、ニュースで目にし耳にする「いま」の最も先鋭的な諸問題を理解し、考察するのが、先端社会論クラスターです。

## <教員紹介>

### 異文化関係論クラスター

大石 侑香（おおいし ゆか） 担当科目：文化人類学1・2ほか

専門は、文化人類学とシベリア・北極地域研究です。自然と人間とのかかわりあいに関心を持ち、(1) 寒冷な環境に人類がどのように適応していったか、(2) 気候変動やソ連崩壊といった自然環境・社会経済変化に対して人々はどのように文化生態的に適応してきたかについて、フィールドワークの手法を用いて研究してきました。具体的には、シベリア先住民を対象に、ソ連崩壊後のトナカイ牧畜・狩猟採集・漁撈の生業複合とその技術や環境利用の変化の解明に努めてきました。最近は、自然資源管理と食の問題や毛皮産業の近代化による人と動物との関係や動物観の変化について研究を進めています。

私の研究対象は寒冷地や自然と人との相互関係ですが、卒論指導では地域やテーマを限定しません。異なる環境に暮らす人々、異なる価値観と出会うことで揺らぐ自己と向き合い、自分なりの面白い研究テーマを見つけてください。

下條 尚志（しもじょう ひさし） 担当科目：現代民族誌学1・2ほか

専門は歴史人類学、東南アジア研究。ベトナムの異種混血的な地域社会を中心に、文化人類学的調査を通じ、東南アジアの人々の過去と現在を考えてきました。拙著『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史』では、植民地化と脱植民地化、戦争、社会主義、市場経済化といったナショナルかつグローバルな地域再編の圧力に対し、人々がどう生き残りを図り、ローカルな秩序を紡ぎ出してきたのかを論じました。その際、兵役逃れの間や闇市、非合法越境ルートといった「国家の介入しにくい空間」の生成原理に着目しました。

人類学、歴史学という学問領域、そして東南アジアや東アジアのような地域区分の「継ぎ目」をつなぐことを目指しています。特定の専門や地域に限らず、日本を含めた世界の民族、マイノリティ、宗教、移民・難民、周縁・辺境、戦争、社会主義などの問題に関心があります。こうしたテーマを、日常を生きる人々の立ち位置から考えましょう。

梅屋 潔（うめや きよし） 担当科目：現代社会人類学1・2ほか

社会人類学、民族学、民俗学、宗教学、宗教社会学を専攻。調査地はアフリカ、日本。ヨーロッパにも関心を持っています。もっと狭い意味での専門は、「呪い」（ウィッチクラフトやソーサリー）ですが、

「呪い」だけに関心があるわけではなく、様々なテーマを幅広い文脈で考察することを大切にしたいと考えています。最近はその「呪い」を公共性やコモنزの議論に結びつけて考えるようになってきました。広く世界システムの皺寄せ、近代の矛盾が集約されているテーマに関心があります。アフリカはその代表ですが、人類にとって不幸なことに、この現象はユビキタスです。変わったところでは、開発（JICA での実務経験あり）、ユネスコ世界遺産や無形文化財遺産なども守備範囲に入ります。（東北にいたことがあるので）東日本大震災のつめあとを検証する作業も地道に続けています。また、修験道研究にも一定の知識はあります。

岡田 浩樹（おかだ ひろき） 担当科目：比較民族学1・2ほか  
専門分野：文化人類学

私の研究フィールドは大きく3つです。(1) 日本と東アジアの近代化、地域社会とグローバル化の問題、(2) 移民、多文化とマイノリティの包摂の問題（ベトナム、ブラジル）、(3) 先端科学技術の人類学（宇宙人類学）です。フィールドワークで生活の微細な行為や意味にこだわり、日常の「あたりまえ」に疑問を持つ。異文化（他者）を通して自文化（自分）を突き放して見る、そんな考え方や知的体力を身につけて欲しいと願っています。複雑なモノやコトを複雑なまま、理解する知的体力を養ってください。注意！もともと「学校」は、嫌いです。隙あらば、大学を脱走し国内外のどこかを漂っています。あきらめないで探してくださいな。

著書：『公共人類学』（共著：東京大学出版会 2014）、『宇宙人類学の挑戦』（編著：昭和堂 2014）『トラウマを生きる』（共著：京都大学人文科学研究所 2019）など

齋藤 剛（さいとう つよし） 担当科目：文化混交論1・2ほか

私の専門は社会人類学で、北アフリカのモロッコで調査をしてきました。主な関心はムスリム（イスラーム教徒）の日常生活、移民のネットワークと故郷との関係、エスニック・マイノリティが展開する政治・文化運動、イスラームにおける知の伝達などが挙げられます。

卒業論文の指導にあたっては、中東における宗教、民族、社会、文化などに関心がある人だけでなく、中東以外の地域であったとしても文化人類学的観点から研究を進めたいと考えている人を広く歓迎します。たとえば、これまでに指導した卒業論文のテーマの中で中東以外の地域を扱ったものとしてインドにおけるダム開発、日本における地域再生運動、フランスにおける移民問題、バックパッカーの活動などがあります。卒業論文執筆においては、人生を貫くライフテーマのようなものを見出してほしいと考えています。

## 多文化共生論クラスタ

坂井 一成（さかい かずなり） 担当科目：国際関係論A・Bほか

専門は国際関係論、EU 研究、移民難民問題、フランス政治です。一方で柔らかいところでは、ワインや競馬などの文化要素が、どのように社会に根付いているかに関心を深めています。

私の根本的な問いは「異なる文化集団間の平和的な共生」です。とくに注目している地域は EU（欧州連合）、フランス、地中海で、移民難民問題はもっとも注目している課題です。また文化に着目する意味では、教育や文化をめぐるユネスコの活動、各国の文化外交も扱います。

指導学生のテーマは多岐にわたり、EU、欧州各国の政治、移民難民問題に加え、教育や文化の分野、

さらにワインやビールなど食品をめぐる政治・地域振興など、ユニークなテーマも増えています。

卒論指導では、必ずしも国際関係論には限定せず、あくまで学生の関心を尊重したテーマを選択させ、そのテーマをどのように学術論文に仕上げていくか、文献の探し方を含めて指導しています。

新川 匠郎（にいかわ しょお） 担当科目：多文化政治社会論A・Bほか

私はドイツ語圏（ドイツ・オーストリア・スイス・リヒテンシュタイン）の政治制度を主対象に研究しています。ユーロ危機・移民難民問題・ブレグジット等の出来事が起こる中、どのような政治の決め事を作りながら、それぞれの社会では多文化共生という課題に取り組んでいるのでしょうか。

このドイツ語圏の政治制度を知る上で、関心ある国・地域を学び、比較することは大切です。経済政策・移民難民政策・福祉政策などが選挙や議会を通じてどのように実施されるのか。欧州圏に留まらない他のエリアと比較することで理解が深まる可能性もあるでしょう。

テーマは必ずしもドイツ語圏に限定しません。皆さんの目に留まる世界中の政治制度がどのような原因で生じて、いかなる結果をもたらしているのか。議論を裏付ける資料・データの集め方や分析の仕方を考えつつ、「面白い！」と思える問題の解釈や解決法を導き出すアイデアを一緒に練っていければと思っています。

安岡 正晴（やすおか まさはる） 担当科目：比較政策論A・Bほか

専門分野：公共政策論、比較政治学、アメリカ政治論

私は各国や各地域が行っている政策を比較することを通じて、グローバル化が生み出している様々な矛盾や課題を解決する手段を考えることを目指して、研究し、教育しています。大学での研究や学習は過去に起こったことを後から分析したり、実際に行われていることよりもその背景や歴史を学ぶことが多いのですが、私の講義や演習では、移民、福祉、医療、税制、教育、環境・エネルギー、テロ対策、災害対策、ジェンダー政策など、様々な政策分野で各国が実際に行っていることを具体的に知るべく最新の情報を入手して、研究・解説し、学生の皆さんが社会に出て、具体的な決定や選択に迫られた場合に合理的な判断をするのに役立つように指導したいと考えています。日本の社会や政治、外交をどのように改善していくのか、若い皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

中村 覚（なかむら さとる） 担当科目：平和構築論A・Bほか

専門分野：国際安全保障論、途上国の政治、中東政治

新型コロナウイルスの世界的感染の中、グローバル社会のあり方は劇的に変化し 始めました。途上国は、新型コロナウイルスの感染者数では最悪ではないように 見えるかもしれませんが、影響は深刻になり始めており、世界的な貧富の格差 は、拡大する危惧に直面しています。途上国の内戦、大国間の新冷戦、AI化、地球温暖化問題など、課題が山積みの世界は今後どうなるのでしょうか。2050年頃には、世界人口の半数は、イスラーム教徒が占めるだろうと予測されています。これらの話題の全てが、自分たちの将来に直結していますね。演習では毎週、最新の国際ニュースを解説しています。最近のゼミ生による卒論は、中東政治、難民問題、多文化共生に関わるテーマが多いです。学生のみなさんの個性的に伸びる力が大切だと思いますので、早めに卒論指導を開始して、自分のペースで成長を自分で実感してもらってきました。就活指導も大切にしています。2021年度は、GSPで国際協力論を開講します。

## モダニティ論クラスタ

鹿野 祐嗣（しかの ゆうじ） 担当科目：近現代社会思想論A・Bほか

私の専門分野は哲学・思想の研究であり、特に 20 世紀フランスを代表する哲学者ジル・ドゥルーズの研究をしています。

19 世紀末から続く社会的・思想的変動を受け継ぐかたちで、戦後のフランスでは、産業革命とブルジョワ革命によって成立した近代社会の体制を問い直し、そこに連動していた近代哲学とその人間中心主義的な価値観を乗り越えようとする思想的運動が本格的に花開きました。そうした思想上の革新運動は、狭義の哲学の内部だけに留まらず、西洋近代の人間観を根底から変えた精神分析や文化人類学などを巻き込み、ヌーヴォー・ロマン（文学）やヌーヴェル・ヴァーグ（映画）、前衛演劇、ヒッピー・カルチャーといった芸術実践上の革新運動と共鳴するかたちで展開されるとともに、キューバ革命（チェ・ゲバラ、カストロ兄弟）や多種多様な植民地独立闘争（エジプト、アルジェリア、ベトナム……）、そして 1968 年のパリ 5 月革命に象徴される先進諸国の学生運動といった、現実の政治的な革命運動とも呼応するものでした。

よって、社会思想を主題とする授業の中では、近代社会の成立とその思想的側面の把握から出発しつつ、マルクスやニーチェ、フロイトが切り開いた地平上に現れた近代性を根底から問い直そうとする思想上の革新運動の意義を、現実の政治運動も視野に入れながら検討していこうと考えています。

市田 良彦（いちだ よしひこ） 担当科目：近現代経済思想論 1・2ほか

私の専門分野は社会思想史といえます。高校の授業科目のなかでは「倫理社会」に近いと言えるかもしれません。「倫理社会」の教科書に登場する人物を私が授業や研究で取り上げることはあります。しかし社会思想史が「倫理社会」と大きく異なるのは、いつ誰がなにを言ったか、それは先行する思想にどう影響を受けていたか、といった「観念の歴史」それ自体には本質的関心を注がない、という点です。私たち社会思想史の人間が着目するのは、観念を社会的に観念として成立—流通させる前提的〈問題〉です。どういう〈問題〉に答えようとしてある観念は提出されたのか、〈問題〉のほうは誰がなぜ提出したのか、さらにどう歴史的に変化してきたのか、等々に私たちは興味をもちます。社会動態プログラムにおいては、その〈問題〉が「近代（モダニティ）」です。「近代」とはどのような時代で、なぜ問われなくてはならなかったのか、「現代」ははたしてその「近代」なのか…。様々なテキストを読みながら、文字の下にある〈問題〉に眼を向けていきたいと思います。

上野 成利（うえの なりとし） 担当科目：近現代政治思想論A・Bほか

たとえば民主主義。これこそ最良の政治制度と信じて疑わない人も多いでしょうけれども、ナチズムがワイマール共和国の落とし子だったように、民主主義からファシズムが生まれる可能性もあるし、ともすると「民主主義の敵は抹殺せよ」という物騒な話にもなる。自由で公正な世界を求めた結果、かえってそれを裏切るような事態が生じかねないわけです。こうした逆説と真剣に向き合おうとすれば、そもそも人間とは何か、自由とは何かといった根源的な問いに直面することにもなるでしょう。これはたとえば Th.W.アドルノ、H.アーレント、M.フーコー、J.ハーバーマスといった 20 世紀の思想家たちが取り組んだ問いでもあります。思想家たちの格闘に触発されつつ自分なりに思考を巡らせたい人は、モダニティ論クラスタで卒論に挑戦してみてもはどうでしょうか。社会思想・社会哲学的な問いに沈潜して

ゆくうちに、ものの見方ががらりと変わる快感を覚える日が訪れるかもしれません……。

## 先端社会論 クラスター

西澤 晃彦（にしざわ あきひこ） 担当科目：現代社会理論A・Bほか

自分の仕事は、都市社会学から始まって、階級・階層論、社会的排除、貧困へと横滑りしていくという流れで展開してきた。その流れに、地理学者のような仕事や日本社会のイデオロギー分析のようなものが絡んでいる感じだ。どのような現象について論じても、ジェンダー、家族やエスニシティ・レイシズム・ナショナリズムについて考えることになるので、そういう話も書いたものの中では結構出ている。最近では離れてしまっているけれども、統計データをいじったりすることも必要があればやっていた。そんなこんなで、テーマやジャンル、調査方法等によって私がどのような人間なのかを即断しないでいただきたい。社会学屋がどんなやつかは、やはりその視点というか切り口というかそのあたりの個性で決まるのだと思う。授業も判断材料にはなるけれど、やっぱり書いたものを読んでほしいなどこれはお願いいたします。みんなもっともっと本を読んでね。

櫻井 徹（さくらい てつ） 担当科目：グローバル正義論A・Bほか

大坂なおみが“日本人”であるとは、何を意味するのでしょうか。私は、グローバル化とともに国境線が資本・情報・モノ・人間によって頻りに横断されるに伴い、国家的な市民資格——国籍——の意味がいかに変容しつつあるのかを中心に研究しています。

人々が安全な生活を求めて国境線を横断しようとするときも、彼らの“人権”を保障すべきことが叫ばれる一方、国家主権による国境線の管理が依然として強硬に主張されています。本来、民主政治にとってその意思決定への参加資格をどのように決めるかが重大な問題である以上、このような“移住の政治”の出現は、現代民主主義はどうしたらその正統性を保てるのかという深刻な課題を生んでいます。主権国家の自己決定への止まざる要求と普遍的な人権原理とのディレンマに興味がある人は、ぜひ授業を覗いてみてください。近著には以下のものがあります。‘The Borders of Law’, in H. Takikawa and M. Usami eds. *Rule of Law and Democracy (Archiv für Rechts- und Sozialphilosophie Beiheft)*, Stuttgart : Franz Steiner, forthcoming.

青山 薫（あおやま かおる） 担当科目：ジェンダー社会文化論A・Bほか

専門は、社会学の観点からみるジェンダー/セクシュアリティ研究および国境を越える人の移動の研究です。その中でも、理論的には、人と人のコミュニケーションに代表される相互行為やその意味によって社会が構成されていると考える「象徴的相互行為論」、社会構造と個人の関係は一方が他方を決定するものではなく、前者が後者を、後者が前者をつねに規定しあう関係だと考える「構造化論」にとくに関心があり、調査方法としては、ライフ・ストーリー（個人史）の聞き取りやネットワーク分析、映像などの表象分析にとくに興味があります。具体的には、グローバル化した社会における世界的国内的な格差、移住・移民、ケア労働・性労働・家族・婚姻の平等化（同性婚）、「LGBTAIQ 問題」、これらについての文学・映画・報道・商品化といった、公私にわたる変化を引き起こす事象について深く考えたい人、目からうろこを落としたい人には、ぜひゼミに来てほしいです。

小笠原 博毅（おがさわら ひろき） 担当科目：メディア社会文化論A・Bほか

カルチュラル・スタディーズという視座から、人種とジェンダーに縛られた考え方が、日常生活や他

者との関係、ひいては自分自身を見る見方をどのようにつまらないものにしてしまっているか、そこから飛び出すにはどうしたらいいのかを研究しています。主なフィールドはイギリスの現代社会です。カルチュラル・スタディーズは、社会で起きている出来事を文化的「に」検証するアプローチです。文化「を」研究するわけではありません。文化的「に」とは、日常生活の中で浮かぶ疑問、直面している問題、「なんとかならんかなこれ」と悶々とする事柄を、より広範な政治や経済や思想に関わらせて批判的に考え、「次」に向かって飛ぶ技法を身につけるということです。好きとか嫌いとか、良いとか悪いとか、合うとか合わないとか、ぼやっと感じていること、または「これはおかしいんじゃないか？」と密かに頭にきていることを、練られたコトバで理解し、考え、表現することが大事です。文学、音楽、映画、マンガ、アート、スポーツ、ファッション、社会運動、時事問題、「きっかけ」はすぐそこにあります。

工藤 晴子（くどう はるこ） 担当科目：現代規範論(2022年から開講予定、2020年以前生は履修不可)ほか

国際社会学を専門とし、ひとの国際移動とジェンダーやセクシュアリティの関わりについて、特に難民・強制移動におけるセクシュアリティの規範という視点から研究しています。セクシュアリティがひとの移動に関わる制度、経験、権力構造をさまざまに構成、規定する要素であり、国際移動の経験や現象がジェンダー、セクシュアリティに関わるアイデンティティやコミュニティ、規範を変化させ、再構成することに関心を寄せながら、移民・難民の包摂と排除について考えています。また、わたしはこれまで日本、エジプト、トルコの難民保護の実務に携わってきました。「人道支援」や「国際協力」の持つ「暴力性」や支援者／被支援者の権力関係とはなにか、大学という場で学び、議論し、書くことが、実際に移民・難民と呼ばれる人々やマイノリティの人々の経験に対して一体どのような意味をもつのかということについても、みなさんと一緒に検討したいと思います。

### 3. グローバル・コミュニケーションプログラム

言語・感性によるコミュニケーションの可能性と問題点や、ICTを用いた多彩な情報の収集・分析・発信に関わる能力を育成し、これらの研究成果をグローバルな課題解決に活用する能力を身に付けます。

#### 言語コミュニケーション論クラスタ

コミュニケーションに欠くことができない、もっとも基本的な道具がことばです。ことばの分析に必要な知識を学び、その構造や機能、言語の習得や翻訳の仕組み、ことばによる表現にいたるまで、多角的に研究します。

#### 感性コミュニケーション論クラスタ

コミュニケーションでは、心が通じ合うことが大切です。この「心」はどのように伝えられ、理解されるのでしょうか？私たちは、コミュニケーションを音声科学・応用言語学・心理学・比較認知科学などの側面から実証的に研究しています。

#### 情報コミュニケーション論クラスタ

情報技術の文化的な影響を考える上で必要な情報科学の基礎や応用技術、情報技術を用いた効果的なコミュニケーションの方法や、コミュニケーションの可能性を広げるための新しいツールの開発について研究しています。

## <教員紹介>

### 言語コミュニケーション論クラス

田中 順子（たなか じゅんこ） 担当科目：第二言語習得論1・2ほか

専門は第二言語習得論（Second Language Acquisition）です。「第二言語習得論」とは、第二言語の獲得に関わる要因、獲得プロセス、到達レベル等について、観察や実験を通じて研究する実証的な学問分野です。ここでいう第二言語とは、母語あるいは第一言語（first language）を習得した後に学ぶ言語全てを指し、いわゆる「外国語」として習得する場合と、その言語が話されている状況下で習得する“狭義の”「第二言語」習得の場合の両方を含みます。第二言語習得論の中でも、英語学習における個人差の影響とその現れ方や、多言語併用状況下での母語話者による第二言語話者の発話の評価と受容に興味を持っています。

石田 雄樹（いしだ ゆうき） 担当科目：言語機能論1・2ほか

言語学や物語論の理論に基づいた、文学作品の分析を行っています。これまでは主に18世紀フランスを中心に、「自己語り」や幸福といった問題に取り組んできました。私は「私」をどのように語るのか、そのような「自己語り」の幸福とは何か。このような問題を明らかにするためには、そもそも「語り」とは何か、文学作品を成立させている規則や条件とは何かを問わなければなりません。例えば一人称や三人称といった人称の差異は、作品にどのような規則をもたらしているのでしょうか。私の研究は文学テキストの背後に隠れている言語の構造や機能を考察した上で、作品の意味や主題をより正確に深く理解することです。私の専門はフランス文学・思想ですが、学生の皆さんのテーマはフランスに限定しません。文学や思想テキスト、異文化理解、翻訳といった問題を「語り」という観点から一緒に考えていきたいと思っています。

小松原 哲太（こまつばら てつた） 担当科目：コミュニケーション表現論1・2ほか

認知言語学のアプローチから、意味論、文法論、語用論の研究をしています。特に、コミュニケーションにおける言葉の効果的な表現法に興味があり、比喩などのレトリックの分析が専門です。言語表現に使われている語彙や文法の構造、談話やテキストの文脈、社会や文化の背景知識を分析することで、作家、詩人、脚本家、芸人、記者などの言語の達人たちの技巧に加え、会話やSNSを通じて日々の生活のなかで言葉を活用し、言葉と格闘する私たち自身の日常的な言語表現法のメカニズムを解明したいと考えています。言語学は、言語用例の収集、観察、分析と切り離すことができません。私たちの身近にある面白い表現を集めて、言語学の観察眼を通して見てみましょう。

藤濤 文子（ふじなみ ふみこ） 担当科目：翻訳コミュニケーション論1・2ほか

専門は翻訳研究(Translation Studies)です。翻訳の歴史は古いですが、翻訳研究が一学問領域として確立したのは1970年代で、まだまだ若い学問です。翻訳は、ただ原文に忠実に置き換えたものだと捉えられがちですが、翻訳を異なる言語文化間のコミュニケーション行為の中に位置づけると、クリエイティブな側面が見えてきます。言語によるものの見方をどう扱うのか、文化の差をどう越えるのか、原文読者とは異なる価値観やニーズをもつ翻訳文読者とのコミュニケーションを成立させるために何が

必要なのか、そもそも翻訳行為にどのような要因が作用しているのか。そのような問題意識をもちながら異文化コミュニケーションとしての翻訳行為を考えていきます。淡路島から海を越えて通っています。海と山と田園風景に囲まれた田舎暮らしを満喫しています。

## 感性コミュニケーション論クラスタ

北田 亮（きただ りょう） 担当科目：非言語コミュニケーション論1・2ほか

認知神経科学を専門としています。神経科学は心理学・生理学・計算科学・精神医学等を組み合わせて、ヒトのこころの仕組みを解き明かそうとする学問です。学生時代は研究者になるつもりは全くなかったのですが、知られていないことを発見する喜びを経験してから現在に至ります。これまで実験心理学的方法や脳機能イメージング法を用いて、健常者・視覚障害者・発達障害者を対象に、感覚から社会認知に至るまで研究を行ってきました。最近では社会的ネットワークの解析に手を出そうとしています。非言語的コミュニケーション・心理学に関する授業を担当しますが、これらの授業や指導を通じて、ヒトの行動やその元となる仕組みを客観的に理解するための手法を学ぶ機会を提供します。具体的な研究内容については右上のQRコードを参考してみてください。



林 良子（はやし りょうこ） 担当科目：音声コミュニケーション論1・2ほか

外国語としての日本語教育や、日本語や外国語の音声やコミュニケーションの習得と障害を主な研究テーマにしています。言語と社会との結びつきに強い関心があり、最近では難民・移民のための言語教育、ジェンダーと言語教育、外国語学習におけるヨーロッパ参照枠（CFER）や複言語（多言語）主義、異文化コミュニケーション能力の測定といったテーマについても取り組んでいます。あちこちに行っては土地のこぼれ話を聞いたり（+食べたり）するのが好きなので、方言学や少数言語、その言語政策にもとても興味があります。学部共通授業ではドイツ語を教えており、ドイツ語圏とイタリアを主なフィールドとして年に数度訪れて研究活動を行っています。担当する講義、音声コミュニケーション論では、英語のバラエティや日本語と英語の音声の比較し、なぜ「日本人は英語がうまくならないのか」といったトピックについて皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。こぼれ話とその習得を文化理解のキーワードとしたい学生さん達との出会いを待っています。

南本 徹（みなみもと とおる） 担当科目：コミュニケーション構造論1・2ほか

主な研究対象は古代ギリシア語です、と書くと別世界の人のように感じるかもしれませんが、古代ギリシア語といえども日本語や英語と同じ、ヒトの脳が使う言語に違いはありません。古代ギリシア語のこの点は日本語と似ている、と感じることもあります。専門は歴史言語学で、数百年から数千年のスパンで言語がどのように変化するか（あるいは、変化しないか）を観察しています。古代ギリシア人はそれぞれ地元の方言で文章を書いて碑文に刻んでいたのも、各地の方言の特徴を比べて分析することで古代ギリシア語の歴史をさかのぼることができます。同じような研究は日本語の方言でも、あるいは他の言語でも同じようにできます。また、古代ギリシア語の研究のかたわら、「目で見るとの言語」である手話言語にも関心を寄せ、少しずつ日本手話を勉強しています（そう、「日本手話」です。日本手話とアメリカ手話とイギリス手話とドイツ手話はまったく別物です）。

巽 智子（たつみ ともこ） 担当科目：コミュニケーション比較論A・Bほか

日々私たちは言語を当たり前のように使っていますが、言語には多くの謎があります。私たちは言語をどうやって身につけたのでしょうか？言語にはどのような構造や性質があるのでしょうか？言語を話したり理解する仕組みはどうなっているのでしょうか？このような問いは、素朴な疑問でありながら、世界中で多くの研究者が挑戦している大きな問いでもあります。私もそんな研究者の端くれとして、心理言語学や記述言語学を基礎としながら自由な発想で研究し、言語と、言語を話す私たち自身をより深く理解したいと考えています。第一言語習得や心理言語学のトピックはもちろん、様々な言語の文法、話し言葉など、言語現象に強い関心のある学生の皆さん、一緒に研究しましょう。

松本 絵理子（まつもと えりこ） 担当科目：認知コミュニケーション論1・2ほか

認知心理学が専門ですが、神経科学や神経心理学などの領域にまたがって脳と心のしくみを研究しています。人間の認識能力の素晴らしさといい加減さ、の両方に興味が尽きません。これまで脳損傷患者や高齢者の認知機能研究や、健常者の脳活動をMRIで計測する脳イメージングなどを行って来ています。現在も脳波計や光トポグラフィー、眼球運動計測、など複数の機器を用いて、心の働きを研究しています。最近の関心では、注意の制御（不注意、無意識的な注意処理、気が散るのはどうして？）と、感情・情動の関わりです。なぜ人は怖いものに惹かれるのか？など心の働きにまつわる問題をぜひ一緒に考えていきましょう。

## 情報コミュニケーション論クラスタ

西田 健志（にしだ たけし） 担当科目：ITコミュニケーションデザインA・Bほか

コミュニケーションの問題を中心に、情報技術を駆使して日常生活に潜んでいる問題をあらわにすること、解決することに取り組んでいます。みなさんは大学生活や海外研修などを通じて、ハッと視野が広がるような体験をしてきたと思います。今や日常生活の隅々にまで浸透した情報技術をうまくプログラムすれば、そんなハッとさせられる瞬間がもっとたくさん、もっと多くの人に訪れるようにできるはず。たとえば「コミュカがそんなに大事か？」「英語の発音なんて気にしなくていいんじゃないか？」と考えさせるプログラムを私は作ってきました。みなさんの気づきを一緒に研究として花開かせることも毎年楽しみで、自力で気づきを具現化できる力を身に着けてほしいと願って授業や指導をしています。具体的な研究事例は語りつくせないなのでQRコードでホームページもぜひ見てください。



村尾 元（むらお はじめ） 担当科目：社会システム科学A・Bほか

僕の元々の専門は人工知能や機械学習で、遠い昔はロボットを動かしたりしていました。しかし、ロボットに知性を持たせようとする社会性が必要ということが分かり、徐々に単体の知性ではなく、集団としての知性とか性質なんかを調べることになりました。その過程でビッグデータの分析に手を染めるなど、興味の赴くまま勉強してきて、今では社会システム科学というなんだか捉えどころのない学問を標榜しています。そういった僕自身の経験もあって、学生のみんなには、まず、身近な疑問や興味を大切にしたいと思っています。その身近な疑問や興味を単なる「面白そう」で終わらせずに、他の人にも説明できるように紐解いていくことが研究の第一歩だと思います。僕のゼミでは、そういった疑問や興味を解決するために、人工知能や機械学習に代表されるデータサイエンスの技術を勉強し、それ

を上手く利用することを検討します。

清光 英成（きよみつ ひでなり） 担当科目：データマネジメント1・2ほか

様々な情報を有効に利用するために、資料の構成方法について学びます。

研究テーマはソーシャル・コンピューティング、コンピュータと教育の分野です。国立情報学研究所(NII)が提供するリポジトリを用いた大規模データの利用では、Cookpad・楽天レシピデータセットから食感語(Food Texture)の日英仏中比較と可視化ならびに情報検索との融合、SNSによる情報発信行動分析では、セキュリティ啓発ならびに教育の可能性を探求しています。

康 敏（かん みる） 担当科目：統計情報処理1・2ほか

情報通信技術（ICT）を活用して外国語学習を支援するシステムの開発研究を行っています。Siriを相手にして、外国語を聞き取ることができるかどうか、喋るのは上手になるかどうか、などの調査研究はもちろんICTを活用した研究になりますが、データ分析手法を取り入れたシステム開発は私の研究の中心となります。英語ディクテーションの練習結果から個々の人の聞き取れない音を見つけ出して個人専用のトレーニング教材を自動作成する研究では、データ分析がメインであり、システム開発用の音声合成ソフトも使いました。最近では、自然言語処理技術を活用した作文支援システムの開発を行っています。対象とする言語は英語と中国、そして日本語です。皆さんのちょっとした思いつきは意外と面白い研究ネタになる可能性があります。そのとき相談に来てください。

大月 一弘（おおつき かずひろ）

ICTの活用に関する研究をしています。活用の研究は大きく2つに分かれます。ひとつは、既存のシステムがどのように活用されているかについての分析・評価です。例えば、SNSを利用者がどのような使い方をしているのか、利用上に課題やその改善の方法などを調査・分析・提案します。もうひとつは、新しい分野へのICTの応用の可能性を広げることです。様々な分野のニーズに適した便利なシステムを設計・提案したり、他の分野で使われているICT技術に着目して、その技術が利用できそうな新たな分野を見つけていくことを行います。プログラミングで実際にシステムを作ってみる場合もあります。いずれのパターンの研究を行う上でも、利用する側の人間の立場を重視して研究を行います。

## グローバル文化学科教員一覧(2021年4月現在)

指導教員希望調査の際、こちらに記載の教員を選ぶようにしてください。

### グローバル文化形成プログラム

クラス	氏名	備考
日本学	辛島 理人	2021年4月～2022年3月不在予定
	昆野 伸幸	
	寺内 直子	
	板倉 史明	
	長 志珠絵	
アジア・太平洋文化論	萩原 守	
	伊藤 友美	
	貞好 康志	
	谷川 真一	
ヨーロッパ・アメリカ文化論	小澤 卓也	
	井上 弘貴	
	西谷 拓哉	
	松家 理恵	
	野谷 啓二	2022年3月退職予定
越境文化論	田中 祐理子	2021年4月着任
	塚原 東吾	
	北村 結花	
	近藤 祉秋	
芸術文化論	池上 裕子	
	石田 圭子	
	岡本 佳子	
	松井 裕美	決定した場合、後期の特別演習A・Bは仮指導教員のもとで指導を受ける。
	岩本 和子	2021年4月～2021年9月不在予定
	高田 映介	2021年10月着任予定

グローバル社会動態プログラム

クラス	氏名	備考
異文化関係論	大石 侑香	
	下條 尚志	2021年4月着任
	梅屋 潔	
	岡田 浩樹	
	齋藤 剛	
多文化共生論	坂井 一成	
	新川 匠郎	
	安岡 正晴	
	中村 覚	
モダニティ論	鹿野 祐嗣	
	市田 良彦	
	上野 成利	
先端社会論	西澤 晃彦	
	櫻井 徹	
	青山 薫	
	小笠原 博毅	
	工藤 晴子	2021年4月着任

グローバル・コミュニケーションプログラム

クラス	氏名	備考
言語コミュニケーション論	田中 順子	
	石田 雄樹	2021年4月着任
	小松原 哲太	
	藤濤 文子	
感性コミュニケーション論	北田 亮	2021年4月着任
	林 良子	
	南本 徹	
	巽 智子	
	松本 絵理子	
情報コミュニケーション論	西田 健志	
	村尾 元	
	清光 英成	
	康 敏	
	大月 一弘	